
成就神の東方の日常 それを壊すリリカルな事件

きらきらぼし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成就神の東方の日常 それを壊すリリカルな事件

【Nコード】

N6431W

【作者名】

きらきらぼし

【あらすじ】

博霊神社に住む「願いを叶える程度の能力」もった神、望はある日幻想郷の外に異変解決に乗り出す。

一部キャラ崩壊してます。

また、似たような設定のSSを執筆なさっている方がいるようですが、私はパクったのではなく、かぶってしまっただけです。その件で叩くのはやめてください。

プロローグ（前書き）

プロローグなので短いです。

プロローグ

「ん~~~~~?」

今眠りから覚め、あたりを見渡す。全開の襖から見た空はまだ薄暗く、起きるには早い事が分かる。

空がうつすらと白んでいるその幻想的な光景を見ると、だんだんと眠くなってくる。

そうして、朝の醍醐味である二度寝をしようかと思い、再び横になり意識を夢の中へ—————

スパアアアアン!!!!

「いったーーーーーい!」

————沈める事は出来なかった。

「号外だよーーーー! 幻想郷一早くて正確な情報をお届けする文々。新聞の号外だよーーーー!」

「届いたのは安眠妨害だよ……」
迷惑

そう言いながら私は私の至福の時間を奪い、そのまま飛んでいく文を恨めしいと思いながら睨んだのだった。



「おはよー霊夢。」

「お早う望。のぞみ」

すっかり目の覚めてしまった私は台所から漂ってくる味噌汁の香りに釣られてふらふらと起きだしてきた訳だ。今日の朝食は白米に味噌汁、冷ややっこに漬物が何種類か。どれもおいしそうだ。

「朝食が出来たわよ。」

「うん。じゃあ食べよっか。」

「「頂きます。」」

まず、私は味噌汁を啜る。

「おいしい！今日は白味噌？」

「ええ。今日は煮干しじゃなくて白子でだしをとってみたの。」

「へえー。んゝゝ漬物もおいしー。」

「本当においしそうに食べるわね……」

「おいしい物はおいしいの。」

こんな感じが私たちの朝の風景。まったりとしてほんわかしていて、私はこの雰囲気が好きだ。

「それより顔に四角くて赤い痕がついてるけど……天狗にやられた？」

「そーなの！ひどいんだよ！人の顔に新聞を全力投擲しておいて謝罪の一つもなし。」

「よければよかったじゃない。」

「二度寝する直前だったの！」

じゃあしょうがないと霊夢はまるで他人事のように言った。

「他人事だもの。」

返って来た返事はとても冷たいものだった。



そんなのんびりした時間も直ぐ過ぎる。昼は大忙しだ。この博霊神社の境内は参拝客でごったがえる。

霊夢はそこで巫女としての仕事をこなす。私は……

「望様。どうか私の願いを叶えて下さい。」

この神社の神としての仕事が待っている。御賽銭はいっぱい入るが、この忙しさは目が回る。

別に姿を直接見せる訳じゃなくて、私は神社の一室に閉じこもって神様の力で賽銭を入れた人の願いを聞くだけなのだが……何十人も心の願いを同時に聞くのは集中してなくちゃつらい。聖徳太子って余裕で同じ事したんでしょ？ 尊敬するわ。

客の中にはちらほらと珍客も見える。

魔女の様な格好の少女に、吸血鬼の従者、別の神社の巫女に神。流石に人が多いこの時間帯には妖怪が来る事は無いが、人の少なくなる夕方には現れるようになる。常連は小さな鬼と胡散臭いスキマだ。

来るたび来るたび酒だの飯だのたかるのはやめてほしいものだ。

「望様。」

おっと、いけないいけない。今は仕事に集中しなきゃ。



真っ赤な夕陽が縁側を照らす時間になると人が少なくなり今度は妖怪が訪ねて来るようになる。

「おーす。」

ほら来た。

「霊夢は？」

「今夕食作ってる。たかんないでね萃香。」

「なんだよーけちー」

やはりたかる気だったらしく、何も貰えないと分かるとつまらなそうに酒を呷る。

飲んだ後はプハーっと、何とも幸せそうだ。

「変わったよね……この神社。」

是は幻想郷の殆ど全員が言う。私が来るまでこの博霊神社は参拝客も無くさびれていたそうだ。

「おかげで昼から酒を飲みには来れなくなっちゃった。」

来るな来るな。そんな常連は要りません。

「つれない事言うなよー。」

いや……つれないとかではなく……迷惑だし。

「なにさー、それだったら私の願いも叶えてよー。」

駄目駄目。私の能力は色々制限があんの。だから参拝客の願いだって全部叶えてる訳じゃないんだから。

「ちえー。」

縁側で酒を飲みながら、毎回毎回同じような会話。日常だなあ。

「望ー、夕飯できたわよー。」

「今行くー。」

「私もー。」

「こんでいい。」

是が私の日常。

私の名前は望

願いを叶える程度の能力を持った

博霊神社に住まう神



キーン

「ん？」

ガバツ！　　っと起き上がる。共鳴の様な感じがした。私の力に似てる。

こんな真夜中に目を覚ましてくれたものに少々憤りを覚えながらもさっきの感じは気になる。

おそらく結界の外から、でも、そんな幻想の様な力は外にはもうない。

力の大きさは目を見張るものがあっただけでも、とても不安定で願いを叶える時に歪んでしまっている。

危険だ。これそのものもそうだが、もしかしたら私の力と共鳴して幻想郷に来るかもしれない。

そうなれば大惨事だ。

だから私は呼んだ、彼女を。

「紫。」

「何？」

「感じた？」

「少しは。」

やっぱり。こんなに直ぐ来ると言う事は既に気が付いていたのだらう。

「どうする？　私がなんとかしよっか？」

「願っても無いけど……いいの？」

「何の何の、世話になってるんだからこれぐらい。……………それに、気になるしね。」

「そう、……じゃあ他の皆には伝えておく。」

「人里の皆には？」

「天狗の新聞と阿求とハクタクに頼るわ。」

「じゃあ平気か。」

「ええ、でも大丈夫？ 外を知ってる青巫女に頼んで一緒に行ってもらえば。貴方は外、全く知らないでしょう。」

「うゝゝゝん、確かにそうかも。あまり人様に迷惑はかけたくないけど……」

「それは貴方の美点だけでもたまには誰かに頼りなさい。」

「それも……そうか。じゃあお願い。でも条件、早苗は戦いに参加させない。これだけ徹底させてくれるのなら」

「分かったわ。じゃあ今から話をつけて来るから、待ってて。」
「うん。」

そう言って紫はスキマの中に消えて行った。

「さゝゝゝて、戻って来るまで二度寝でも「ただいま。」早！！」

どれだけ速攻で話ついたのよ！ とか思っていると、よっこいしょとか言いながら熟睡中の早苗を放り投げる。

「交渉はどうした！？」

食ってかかる私を紫は簡単にいなして言う。

「事後承諾で。」

あんたは悪魔か……

「それより座標は？」

「ああ……えっと、X∥16273564 Y∥82819369

2 Z∥6352962973だけど……」

「行ってらっしゃい。」

え？ と思った時にはもうまっさかさま。

「紫イイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

「んゝ駄目ですよ神奈子様ゝゝゝ。お酒は一時間五升までですゝゝ」

「多っ！！！！」

大丈夫かなあ……色々と不安だ。

そこで私の意識は途切れた。

プロローグ（後書き）

是は他の二つの連載小説のネタが浮かばない時に書く息抜き小説です。

息抜きです。大事なことなので二回言いました。

そんな訳で更新頻度は低いです。それでもいい方はどうか読んでやって下さい。

(地面に) キスから始まる事件捜査(前書き)

こっちのネタの方が早く出たのでこっちの投降をば。
他のも現在執筆中です。

（地面に）キスから始まる事件捜査

「へぶっ!!」

いきなり顔に來た衝撃に目が覚める。

「いったゝゝゝ……」

痛みによって涙目になりながらあたりを見渡す。

森、森、森。

私は森の中に居た。……何故？

「あっ……」

思いだした。外で変な力を感じたから私が行くって紫に言ったら……

「早苗ちゃんと一緒に強制連行されたんだ……」

それはまだいいとしても顔から落とすことはないんじゃないのかなあ……最近私は新聞やら地面に唇を捧げまくってる気がするよ……

「望。」

「うひゃん!」

突然後ろから聞こえてきた声にびっくりして奇声をだしてしまった。

「何?」

直ぐ様後ろを見ると……

「……………」

アリスの上海人形を連想させるディフォルメされた紫の人形がふわふわ浮いていた。

「何それ？」

「貴方達の為に作ったサポート用人形よ。」

……………

「何よ？ その目は。」

「早苗ちゃん、連れて来る必要は無かったんじゃ……」

「何言ってるの。大ありよ。」

「何故に？」

「貴方が幻想郷まで被害が及ぶかも、なんて言ったから結界の強化をしたの。だから私でもあまり長い時間こっちからそっちへの干渉は出来ないの。」

「そう……って言うか今気づいたけど早苗ちゃん拉致ってこないで貴方がこっち来れば……」

「それこそ駄目。こっちで何かあった時に困るでしょ。」

それなら藍を置いてくれば良いんじゃない……と言いかけたが聡明な紫の事だ、何か考えがあるのだろう。

そう思った時、

「あ。」

大切な事に気がついた。

「どうしたの？」

「紫、私達の宿は？」

「あるわよ。」

「嘘！？」

あんの!!!?

「当然じゃない。はいこれ地図。この丸が付いているアパートの3階の324号室よ。」

「分かった……。」

とりあえずそこに向かおうかなと思った時。

ギイシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！！！

咆哮。その大きな空気の振動は私の耳にも届いた。

「な、何事ですか!？」

早苗ちゃんが起きだす。あの地面に叩きつけられても平然と眠っていた早苗ちゃんが起きたのだ。

「つてここどこですか!？」

まあそうなるよね。

「紫、早苗ちゃんの護衛と状況説明よろしく！」

「ええ、気をつけてね。」

私は走り出した。こんな面倒な事態を引き起こしてくれた奴の顔を
拝むため。



「くっ!!」

駄目だ。苦し紛れにシューターを撃っても簡単に避けられる。

「はぁ！」

飛びかかって来たのをバリアで防ぐが、衝撃によって後退させられてしまう。

「ハアハア……」

こんなのを二十一個も回収するなんて……僕に出来るのだろうか。
いや！ やるんだ！ これを発掘してしまったのは僕だ、なら僕が
責任を取らなければならない。

ギアアアアアアアアアア！！

青い宝石が生んだ獣は一直線に突進してくる。タイミングを併せ、

唱える。

「ジュエルシード 封印!!」

緑の鎖が獣を縛らんと襲いかかる。しかし、自身に絡みつく鎖を強引に引きちぎった獣はそのまま突っ込んでくる。

「ぐっ……ああ!!」

とっさにシールドを張ったけど耐えきれず吹き飛ばされる。そのまま木に叩きつけられてしまった。

「くそ……」

駄目だ、獣は他の場所へ行こうとしている。僕の事など眼中にないかのように、駄目だ逃がす訳にはいかない。

僕が気を失う直前に見たものは獣にドロップキックをかます緑色の髪をした少女だった。



「なんかぴかぴか緑に光ってる。」

咆哮の聞こえてきた方向に足を向けると、さっきのものと同じ咆哮に少年の声、更に緑色の光が認識できた。

「ジュエルシード 封印!!」

また輝く。少しまぶしいくらいの光が前方からきている。

「ぐっ……ああ!!」

今度は鈍い音。

「くそ……」

うめき声。っと到着到着。ついに変なものも見えたのでとりあえずドロップキック。

確認すると足の下でもがくUMAと木にもたれかかるように気絶しているフェレット。……フェレット?

「おつかしーなー。男の子の声がしたと思ったのに。」

まさかこのフェレット? ……無いか。幻想郷なら妖怪だろうと思うけど。

次はこれか……

見た事のない獣。おそらく私が感じたのはあれだろう。何がどうなってるのか謎だが。

「さっさとやりますか。」

「『祭器』祈願銅矛。」

スペルカードを発動。一本の神々しい銅矛が私の手に収まる。

「じゃあね。」

そのまま一閃。獣は真っ二つになった。そして、再生する前におそらくは核であろう青い宝石を回収し暴走を抑える。

「……これか。」

正直、驚いた。かなりの魔力だ。とても不安定だがこれ一つで博霊大結界にさえ穴が開くだろう。私の能力がこの石の機能に似ていたからあっさり止まってくれたけど……これは純粋な魔力量なら、魔力砲をバンバンぶっ放す魔理沙より多い。

「確かさっきジュエルシードって聞こえたような……」

それがこの宝石の名前？ いずれにしても調べてみないと。

「うん。この魔力の波長は覚えた。さくくく、検索検索、いくつかあるのかなくくく……あれ？ 分からない。もしかして発動しなきゃ魔力が漏れないのかな？」

まあ地道に探そうかと今は早苗達との合流を優先することにした。



「で、どうだったの？」

「うん、おそらくこの石が原因だね。」

「うわーきれいな石ですねー」

そう言って私は青い宝石を紫に差し出す。あと早苗ちゃん、空気壊すのはやめてね。

「……これ、かなりの魔力ね。」

「うん……不安定だし。危険だね。」

「どうするの？ これ。」

「貸して。」

私は紫から受け取った宝石を――――――食べた。

「「なっ!!?」」

仰天する二人。まあ当然だよな。

「ななななな、何をなさっているのですか望様！ 赤ちゃんじやないんですから！ ほら！ 吐き出して下さい!!」

早苗ちゃん、テンパリ過ぎ。そんな早苗ちゃんを見ながらその石を飲み込む。

「ちょっ！ 望様!？」

「なるほどね。」

紫には私何がしたいのか分かってもらえたようで。私は右手を突きだして手のひらからさっきの青い石を出す。

「え？」

何が何だか、と言う顔の早苗ちゃん。私がしたのは単純な事だよ。

是は魔力の塊なので吸収してしまえば己の魔力として扱える。この石の機能と私の能力は似ているので簡単に取り込める。魔力だけ吸っても良いのだけど、私だと、この量の魔力は抑えきれず漏れてしまい、結界に悪影響をもたらす恐れがある。なら魔力の容器であるこの石ごと取りこんで、後から暴走しないように不安定な部分を調整してから再構築すれば、大丈夫。

と、言う訳なのです。分かった？ 早苗ちゃん。

「は、はい……」

まだ少し動揺している様子。それよか、

「そろそろ、眠くなってきたから寢床に行こっか。」

「は、はい。」

私の言葉で我に返った早苗ちゃんをあわてて付いてくる。そして、

「じゃあそろそろ私は一度戻るわ。」

「分かった。何かあったら宜しく。」

紫も帰って行った。

紫からの地図に書いてあったアパートまで結構遠く、結局着いたのは朝になった。疲れました。紫ィこんなに遠いなら送ってってよ。

(地面に) キスから始まる事件捜査(後書き)

ネタって出て直ぐ書かなきゃ忘れちゃいますよね？ え？ そんなこと無い？ 私はそうです。

だからこっちがかなり早めの投降に、更新頻度が低いと言うより、他の二つよりもひどい不定期です。

お知らせ

お久しぶりです。

既に受験に合格してから一月ほど経過しているのですが、合格して直ぐに自分の書いた文を見てあまりのひどさに吐き気がしました。

そのため、一時、旅人、ポケモン、成就神の投稿を凍結し他の小説を一本に絞って投降しもっと腕を磨きたいと思います。

続きを楽しみにして下さっていた皆様には申し訳ありませんが、もっと腕を上げ、修正してから再開したいと思います。

読者の皆様には心からのお詫び申し上げます。

いつか必ず投稿を再開するので、どうかその時まで待つて頂ければ幸いです。

本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6431w/>

成就神の東方の日常 それを壊すリリカルな事件

2012年1月8日16時48分発行